
彼女が言うことには：零・ZA・音編

零・ZA・音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女が言つことには・零・ZA・音編

【Zマーク】

Z7506A

【作者名】

零・ZA・音

【あらすじ】

突然現れた女の子に俺は見覚えはなかった。そしてその女の子は
… こう言った。

(前書き)

同じあらすじと登場人物で書こうといつも「グループ小説」です。「グループ小説」で検索すると他の方の作品も読めますので、是非ご覧下さい。

この公園に来ると何故か俺の心が落ち着かなくなる。何故だかは分からぬ。でも、それは嫌なものではない。

子供の頃、俺はここで倒れていた事があるらしい。それが何故そくなつたのか俺自身がまったく記憶にないのだ。

そして今、俺はたまたまこの公園を通りかかって、妙な出来事に巻き込まれていた。

正直、俺は驚いていた。なんでこんな事になつているのか、自問自答したが答えなんて出てこない。

そんな俺の事などお構いなしに、目の前で間抜けそつなのほほん顔をしている女の子が一人。

しゃがみこんで近寄つてきた猫と遊んでいる。しかし、猫は女の子をすり抜けでいった。

文字通り、身体をすり抜けで行ったのである。

「ああ～、猫ちゃんっ。どこ行くんだよお～

パタパタと走つて　いや、浮いて追い駆けていく女の子。ここまでお約束過ぎると驚きを通り越していく。

この女の子は

「こんばんわあ～、わたし、ゆうりですっ。一応、幽霊らじーです

「

と先ほど、自己紹介されたのである。つられて俺も自己紹介

をしてしまつた。失敗したかな…と思つけどな。

なんとも明るい幽靈さんだ。怖さと言つものが丸つきりないのである。

足先まで見えているのだが、微妙に浮いているし…着てる服は何故か、花柄の浴衣みたいなもの。

普通、白い奴じやないのか？名前を知らないが、大体幽靈つてそれを着ているから幽靈のイメージつていうものがあるんだ。

それに、頭には三角の布切れはない。あれはお化けか？本当に幽靈か疑わしいが、現に浮いてるから信じるしかない。

「それで、一体俺に何の用だ？」

「んつ？特に無いんだけど…」

口元に指をあてて、空を見上げて思案顔をしているゆうつ。何を考えているんだ？今、特に用はないと言つたばかりだろ。それでも、未だに唸つているゆうつ。

首を左右に振つていてる姿は妙に可愛かつた。黒髪が動きに合わせるように揺れている。

丸く口口口口といった瞳が忙しなく上を見たり、下を見たりと、とにかく忙しい奴である。

「無いなら俺は帰る…じゃあな」

「うわつ！ちよ、ちょっと待つてよお」

帰ろうとする俺の腕を掴もうとして、すり抜けしていくゆうつ。身体からニヨキつと、はえている腕と「うのは不気味だ。

「何をしている？お前はアホか」

「あははつ…そつか、掴めないんだつたあ」

「あのなあ…お前は幽靈なんだろ？掴めないのは当たり前だり

「そうだよねえ…当たり前なんだよね」

俺の言葉に途端に悲しそうに俯くゆうつ。さつきまでの表情とは、うつて変わって今にも泣きそうだ。

「悪い…言つ方が悪かつたな」

「……氣にしないでよ」

ゆっくりと首を降るゆうりは優げに微笑んで、少し潤んだ瞳が俺の目に飛び込んできた。

「わたし、たつき死んだばかりだから……どうせピンチとこないんだよね」

「そつか…」

「だから、気にしないでよ。えつとそれで良介君」

「うあ……その呼び方はやめてくれ」

微笑んでいるゆうりは、おかしそうに笑っていた。笑顔は可愛いが、その思考回路は少し飛んでいる。

背中に走る悪寒がグルグルと運動会をしているようだ。

「なんでもえ～。別にいいでしょ？ 可愛いよお」

「アホつ……男が可愛いなんて言われて、嬉しい訳ないだろつ…」

「まあまあ……それで、良ちゃんと聞いて欲しい事があるんだよ

「はあ……もういい。……それでなんだ？ 早く言え」

痛み出した頭を抱えて話を聞く体勢をとつていると、妙に神妙な面持ちで俺を見ているゆうりがいた。

なんだ……雰囲気が違う。たつきまでのあのバカ面はどけ……。

「あの……わたしの願い叶えてくれますか？」

少し沈んだ……それでいて、力のこもった声が聞こえてきた。なんだ？ 願いつて……。

今更叶えたい願いつて何があるんだ。死んでいるんだから未練つて言ひやつか？

「どうかな……？」

「取り合えず話してみろよ。それから考える」

覗くように顔を傾げているゆうりが俺を見つめている。だから、その目をされると困るんだよ。

俺の中まで見通すような瞳……すげく居心地が悪い。別に俺が悪い事

をしている訳ではないのに、罪悪感がいっぱいだ。

「えっとね…わたし、好きな人がいるの」

「はっ?…好きな人?」

「ぐりと頷くゆうりは、幽霊なのに 幽霊でも、赤くなるのか?

?頬を真っ赤に染めて俯いていた。

可愛すぎるぞ…この野郎。なんでそんなにナイスな表情ができるんだ。おじさん、ストライクだよ。

いかん、暴走している。俺はおじさんではない…これでも、まだ18だ。

「それで、何か忘れたけど…返さなきゃいけないものがある

気がするの」

「返さなきゃいけないもの…?」

なんともあやふやな事だ。何を返すのかぐらこ覚えておけよ。それじゃ分からぬだろ?うが…。

「それで、その…あの…」

「なるほど、分かったつ」

「えつ、あ、あの…良ちゃん?」

突然の俺の声にびっくりして、マジマジと俺を見ているゆうり。意味が分かっていないようだ。

そうだろうな…まだ、何も言ひてないから。話から推理すると、次の展開はその好きな人を探すのを手伝つてとこつ事だらう。

「良…ちゃん?」

「お断りだ」

「へつ…?」

「面倒くさいから、探すのはお断りだ」

きつぱり、はつきりと言つて切つてやつた。

なんで俺が人探し しかも、幽霊の恋のキューピットなんぞしなくちゃいけないんだ。面倒だ…思いつきりな。

そんなもの、靈媒師にでもなんでも頼みやがれつ。俺はまつぱりごめんだ…疲れる事はしない主義なんだよ。

「えつと……探すとかじゃなくて……その……あの……」

「んつ……なんだ?違うのか?」

「うん……その人はもう、見つかったから」

「そつか……なら早く会いに行つて来いよ」

モジモジと指を合わせていてるみたいにそつまつて、俺は空気に行くを見上げた。

星が輝き、薄つすらと見える新月がとても幻想的な光景をしていた。とても綺麗な色をしてる……優しい色をした空だ。

「綺麗だね……私もあそこに行ぐのかな」

隣から聞こえてくるどじか悲しく響く声。目だけを少し向けて見るが、その様子は思つよに見えない。

どじかの空気に行くに落ち着かない俺は、無理やり話を変えようと

「さあな……俺は知らない。まあ……お前がいい子なら行くじゃねえか」

「随分と口が悪くなつたね。良ちゃんは……」

「はあ……?」

意味が分からず思わず身体ごと横を向くと、俺と同じよに空を見上げてクスクスと笑つているゆつりが田に入つた。

その姿を見て、俺の胸は何故か落ち着きを無くしていった。見た事がある 気がする。

どじだ……いつ、どじで俺は見たんだ。

「この空見たのは 一度田かな。あの時は、わたし泣いちゃつてたなあ

「泣いてた……」

その言葉に何かが繋がつていぐ。しかし、その先は見えない……思い出せない。

何故だ?……何故こんなにも胸が痛い。どじしてだ……俺は何かを忘れているのか……。

「また、この空を見れた事が嬉しいな。また、良ちゃんと一緒に緒だもん…嬉しいなあ」

独り言のように呟くやうつりを、俺はただ眺めていた。何かを思い出しあなつていて。だけど、思い出せない…。

「お前は、一体…」

「まだ、思い出してくれないんだね。やっぱ、一度だけ会つただけだから無理かな」

「一度だけ…」

空から俺に田を向けて、懐かしいものを見るような田で俺を見つめているやうつり。

その瞳が、俺を捕らえている。だけど、思い出せない…何故だ？俺は何を忘れている？とても大切な事のはずなのに…。どうして思い出せない。いや、思い出そうとすればするほど、頭に元やがかかつたようになつて思い出せない。

「そうだよ…一度だけ。昔に一度だけ会つたんだよ　わたしの事を慰めて、救つてくれた男の子」

そう言つたやうつは、やつくじと俺に近づいてきた。顔だけがやけに近い距離にあり、俺は内心ドキドキしていた。

何をする気だ？まさか　そんな事はないか。

「わたしが好きな人は…良ちゃんだよ。そして　ありがと。　私に勇気をくれて…」

微かに触れるものがあつた。触れられないはずなのに…それなのに俺の唇に触れる感触は間違ひなくやうつるものだった。

「ふふふ…顔　真つ赤だよ？」

「えつ？…あつ、へ、変な事言つなつ…」

訳も分からず慌てている俺に、元気な

「ふふふつ…あの時も、こんな顔してたね」

「あの…時？」

余計に分らない事を言つてくるやつ。あの時？…いつの事だ？それよりも俺は、昔もこいつと…したのか？

いつだ…思い出せない。なんで忘れてるんだ…どうして…。

「良ちゃんは本当に覚えてないんだね。そつか…ちよつと残念」

俯いて小さく呟いているやうりを見ても俺は、思い出せないでいた。いい加減、思い出してもいいんじゃないか。

俺の馬鹿な頭では、昔の記憶は無いつて言つのかよ。

「ちよつと待て…今、思い出すから

「たぶん、無理だと思つよ」

「はつ…？」

何を言つてるのか分らないが、何故か納得した顔をしてくるやつ。一人で納得してないで俺にも分かるようにな説明してはくれないだろうか。

「私も今、思い出したから。死んだショックでその事だけ、忘れてたみたいだよ…」

「はあ？…何を？」

「良ちゃんの事は覚えてたのに…これつて愛かな」

満面の笑みでいきなりの爆弾発言に、俺の心臓はこれ以上ないくらい跳ね上がっていた。愛？…何の事だ？

当の本人のやうつは、自分で言つた事に顔を真っ赤にして俯いてしまつてている。

意味の分らない事を言つて居るやうつをマジマジと眺めていたり、急に顔を上げて俺を見つめてきた。

「わたし…良ちゃんの記憶を食べたから」

俺は、半ば呆れてゆうつを見ていた。いきなり何を言に出すかと思えば

「何つ…」

素つ頓狂な声を出して俺はゆうつを見つめ返していた。何で言つた？記憶を食べた？…意味が分からないぞ。

「わたしは、生まれてすぐの頃から人の記憶を食べる事が出来たの」「何を…言つているんだ？」

話が飛んでいて分からぬ。記憶を食べる？何の事だ？そんな事聞いた事がない。

「分からぬ…良ちゃんは、わたしに記憶を食べられた人間だもん」

「だから…食べるつて

はかなげに揺れるゆうりの瞳は、俺から逸れていった。静寂が広がつていく…辺りを支配していく静寂が痛い。

「あの時わたしは、この力のせいで泣いていた。一人、この場所で泣いてるわたしに、声を掛けてくれたのが

「俺…？」

無言で頷くゆうつは、ゆうつと空を見上げて…そして

「わたしに生きていく勇気をくれたのが良ちゃん。あの時の良ちゃんは優しくてかつこよかつたよ」

もう一度、俺の唇に触れる感触があった。温もりはない…だけど、

確かに触れている感覚がそこにはある。

優しく微笑んでいるゆうりが、俺のそばから離れていく。次第にその姿が何故か、薄くなっているような気がする。

「ゆ……うり……？」

「そろそろ、行かないといけないみたい……」

「行くって、どこに……」

「 分からない。わたしは、どこに行くんだろ？
ゆうりと首を振つて、ゆうりの瞳から、一筋の涙が零れ落ちていいく。

「 せつめいちゃんの記憶は返したから わたし、あの日以来誰の記憶も食べてないから……」

「おこつ……」

「 ずっと、良ちゃんの記憶と一緒にいれて幸せだった。ありがとうわたし、良ちゃんの事ずっと好きだったよっ！」

頬を流れ落ちていく涙が途中で消えていく。もう回りうが田でも分かるくらいに透けている。

その言葉を最後に闇に溶け込むように消えていったゆうり。その場に一人残された俺は、ただ呆然としていた。

「 なんだつたんだ……」

自然と漏れくる言葉がやたらと俺の耳に響いて聞こえる。それだけ、この場所が静かな事を現している。

さつきまでの騒がしさはどこに行つたのか…。

「 つ……！」

急に頭の中に響く鐘のような音。耳鳴りのように聞こえるこの音は

なんだつー頭が割れそうだ。

次の瞬間、俺は見た事もない光景が脳裏に浮かんできた。

「な、なんだつー…これは」

誰が見ている光景だ…これは。田の前にいるのは女の子。小さな女の子。

『どうしたの?…なんで、なにてるの?』

『ヒツクツ…』

『どうして、ないてるの?』

『わたしに…ちかよらないで…』

『どうして?』

『わたしは…あおへを…』

眩暈に似た感覚が収まつてこぐ。なんだ…今のは?俺の知らない子だった。

いや、違う…知らないんじやない。これは俺の記憶だ 今まで

なかつた俺の子供の頃の記憶だ。

それじや、今の女の子がゆうりなのか?記憶を…つと言つていた。だけど、まだ完全じやない。まだ戻つてない記憶がある…はずだ。あの先はどうなつたんだ。

『あおへ…?』

『わたしま、あおへを…たべるの』

『たべる…?』

『だかり』

『それつておいじいの?』

『えつ…』

驚いている女の子の顔が俺に向いている。喋っているのは俺。正確には、子供の頃の俺だ。

勝手に話しているから、止められない。記憶だからしょうがないのだろうけど、なんともアホな事言っているものだ。

『ぼくもたべれるの?』

『たぶん、むりだよ』

『そりなんだ…ねえ、あそぼうよ』

『えつ…でも…』

『ぼく、りょうすけつー!』

『わたしは』

それから、暫く一人で遊んでいたんだ。そうだ…思い出してきた。俺は、あの日この公園で泣いてる女の子を見つけたんだ。

その時は自分でも分からないが、声を掛けていたんだ。吸い込まれるように近づいていったんだ。

何故かは分からない。でも、ほっておけなかつた…それを思い出した。あの瞳を見たせいかも知れない。

『ぐりくなつたね…』

『そりだね…まつくらいだ』

『そら…』

『えつ…あつ、きれいなおぼしきまだあ』

『うん…』

暗くなつた空を一人で見上げていたんだ。空は、今日みたいに新月で星が綺麗に光っていた。

その後、暫く空を見上げていて、そして

『つよいちやん…』

『なに…?』

『わたしのこと…わすれて』

『えつ…なんで?』

『きつと、いいことなんて』

『いやだよつー』

訳の分からぬ俺は、首を振つて嫌がつていたんだ。忘れるつて事が嫌だつたから?違うな。記憶が戻つて思い出した。俺は、この時ゆうづりの事を新しく友達だと思っていた。

それ以上に好きだつたのかも知れない。子供の恋心だ…ビijoまで本気か分からぬ。

そもそも、そんな感情を分かる事が出来たのか疑問だが…。それで、も、忘れるのだけは嫌だつた。

『だめだよ…りょうちゃん』

『なんで、わすれないとダメなの?』

『わたし…りょうちゃんのこと』

『んつ…』

いきなり塞がれた唇。何が起つたか理解できぬ俺はただ、混乱していた。突然の事に驚いていた俺に、悲しそうな顔をしたゆうづりの瞳が飛び込んできた。

泣いていた。その瞳から大粒の涙をこぼして…。その涙の訳を当時の俺が知るはずも無い。

『えつ……』

その言葉を最後に、俺は意識を失つたんだ。次に目が覚めた時は、病院のベットの上だつた。

なんでこんな所で寝ているのか聞いてみたら、公園で倒れていたといつ。当時の俺は公園にいた記憶がないので

「知らない」と言つたら、精密検査をされた。どうやら、頭でも打つたと思われたみたいだが……なるほど、こういう事だったのか。

「そつか……」

全てを思い出して、妙にスッキリしている。あの日、何があったのか、俺が知らない事が全て思い出す事ができた。

「俺の初恋つて……いきなり現れて、いきなりふられた……そんな感じだつたんだな」

自然と苦笑が漏れてくる。思い出してみれば、俺の初恋の記憶だ。それも、とびつきりに変わつていてる初恋だ。

記憶を食べる女の子……なんともおかしな女の子を好きになつたもんだ。いや、当時はそれすら分かつていなかつただろう。

でも、今の心に残る気持ちは……間違いなく恋心だ。記憶が戻つても、それがなんとも悲しいと感じるのは

「もう、伝えるべき相手がいないんだな……自分で勝手に伝えていきやがつて……」

記憶の中に、俺以外の記憶がある。それは、ゆうじの笑顔の記憶……。幸せそうに笑うゆうじりが俺に何かを言つていてる。

記憶の中、ゆうじは

『つよひちやん…だいすきだよ』

そう言つて、満面の笑みを浮かべて笑つていた。

空を見上げてぼやいても誰にも届かない。伝えたい相手はもうない…。

「俺もお前の事…好きだつたんだぞ」

声はかき消されていく。空には星が瞬いでいる。ゆつくりと俺は、いつまでも空を見上げていた。

あの日、一人で見上げていた懐かしい空をいつまでも…いつまでも…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7506a/>

彼女が言うことには：零・ZA・音編

2011年1月19日21時37分発行